03 2007

衝撃のもてなし!!

参加者、いえしまの民家に泊めてもらう

ワタリガニ、アワビ、サザエ、タイ

食べきれないくらいの食事に
参加者タジタジの現場

加えて 歌や踊りでもてなされ、
興奮の日々！！

その全貌が今、明らかとなる！

こんなもてなし あなたはうけたことがありますか？

私たちはうけたことがありませんでした！

プロジェクト第3弾　ついにいえしまの深層にせまる！

「探られる島」プロジェクト　2007

プロジェクトブック

僕らのもてなしは「想定内」

遠くから知人や友人が訪れて来るとき、僕らはいつも「もてなし」に頭を悩ませる。「カッコいい車」をレンタルして出迎え、たくさんの「有名な観光スポット」を連れて回り、「人気の商業ビル」で買物をしてもらい、「話題のエンターテイメント」の観覧や「メジャーなスポーツ」の観戦をし、「おしゃれなレストラン」で食事を済ませ、「いいかんじのバー」でお酒を飲み、「定番のカラオケボックス」で楽しんでもらい、「きれいなホテル」に泊まってもらう。「情報誌」を読んだり、「インターネット」を検索して＜もてなしの要素＞を見つけだし、綿密なスケジュールを立てる。僕らが生活する都市には、そんな＜もてなしの要素＞がたくさんある。でも、それらの要素の多くは「自分のもの」ではない。だから買ったり、借りたり、予約したりしなければいけない。もてなす側は気を使う。退屈していないか？料理はまずくないか？マンネリルートでないか？お金を出せば「贅沢路線の延長線上」のもてなしはいくらでもできる。でもそれは、もてなされる側にとっては「想定の範囲内」だろう。

カッコいい車で出迎える

有名な観光スポットに行く①

有名な観光スポットに行く②

人気の商業ビルで買物する

話題のエンターテイメントを観覧する

メジャーなスポーツを観戦する

おしゃれなレストランで食事をする

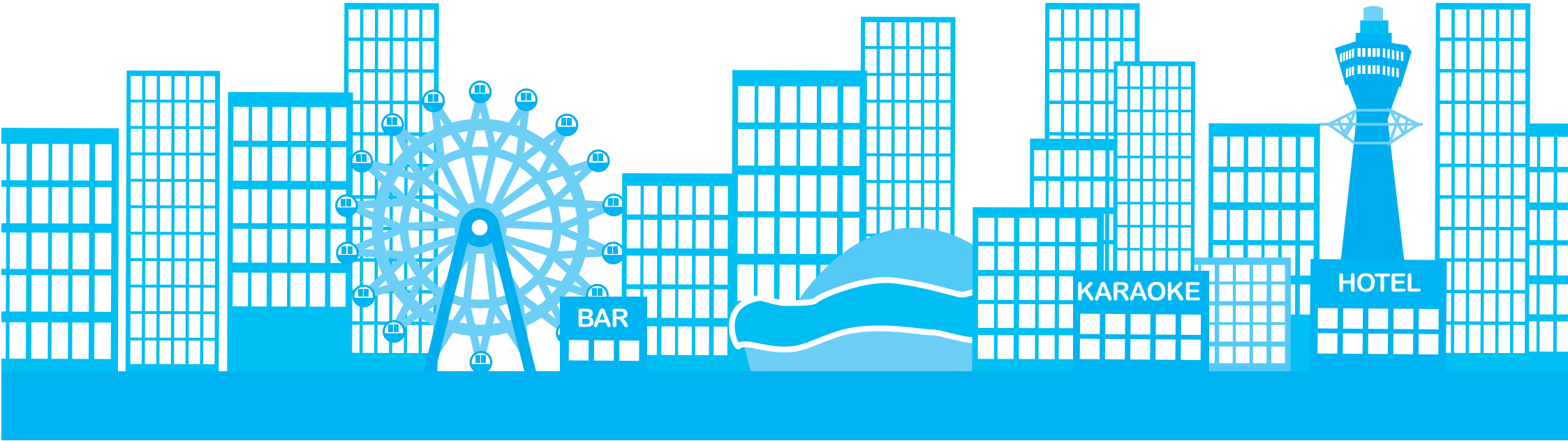
いいかんじのバーでお酒を飲む

定番のカラオケボックスで楽しむ

きれいなホテルで泊まる

情報誌を読む

インターネットを検索する



いえしまのもてなしは「衝撃的」

僕らがいえしまを訪れて感じたことは、いえしまの人たちからのもてなしが「衝撃的」だったことである。とにかくもてなし方が豪快で中途半端なものは無い。でも、その＜もてなしの要素＞は「贅沢路線の延長線上」のものではなかった。それらは、いえしまの人たちの「日常生活の延長線上」にあるものばかりで、それが僕らにとってはとても新鮮で驚きだった。だから今回僕らは家島本島と坊勢島において、いえしまの＜もてなしの要素＞をたくさん写真に収めた。そして、それらの中から特徴的な5つを選び出した。

いえしまの「5つ」の【もてなし】

会わせたい「人」

いえしまの人たちには、僕らのような来訪者に「紹介したい人」がいるようだ。それは近所の人だったり、親戚だったり、「兄弟分」であったり。「兄弟分」とは仲の良い同窓生の間で自然発生的に生まれるいえしま独特の集団。確かに「紹介したい人たち」は個性があって「もてなし上手」な人が多い。宴会では僕らを「昔からの友人」のように迎えてくれた。

伝えたい「伝統」

いえしまは文字どおり外と海で隔てられた「島」である。だから特有の伝統が今でも息づいている。いえしまで宴会をすると自然と「歌」や「踊」がはじまり、いえしまの伝統的な民謡や、その人の「オリジナルの歌？」なども楽しげに披露してくれた。また、年配の方はいえしまの昔話や伝統的文化、個人の武勇伝なども熱く語ってくれた。

食べさせたい「料理」

宿泊先のお宅で出してくれた料理はものすごかった。タイ、メバル、ハモ、アナゴ、エビ、シャコ、イカ、ワタリガニ、・・・。普段は食べることができない新鮮な海の幸の数々。調理法はいたってシンプル。素材が良いので余計なことをする必要が無い。魚をおいしく食べる方法を知り尽くしたいえしまならではの「おもてなし料理」。それにしても量がすごい。

見せたい「仕事」

いえしまの産業は「島ならではもの」も多く、その「仕事場」は僕らにとって興味深いものばかりだった。僕らが泊めてもらったお宅のお仕事は、「漁業」、「魚の仲買」、「海運業」、「石材業」、「八百屋」、「仕出し屋」、「清掃業」など。それらを体験させてもらうことで「いえしまを支えているもの」を理解でき、島の人たちの仕事への誇りを感じることもできた。

持たせたい「土産」

僕らがいえしまの人たちからもらった土産は、どれも心のこもった印象的なものばかりだった。漁師さんからもらった魚はどれも新鮮で、持って帰りやすいように切り身にしてくれた。島のおばちゃんたちが研究している手づくりの「海産物の加工品」もたくさん試供してくれた。宿泊先のお宅では自家製のドリンクやお菓子を持たせてくれた。

「紹介したいもの」がたくさんあること

民泊先からのお出迎え

漁師さんに魚のさばき方を教えてもらう

漁船で島々をクルージング

地元の人にお勧めの展望台を案内してもらう

今回、僕らは家島本島と坊勢島の一般のお宅に「民泊」させてもらうことになった。それぞれのお宅でいえしまの人たちは僕らを盛大にもてなしてくれた。そのもてなしの内容は僕らにとって印象的なものばかりだった。「会わせたい人」、「伝えたい伝統」、「食べさせたい料理」、「見せたい仕事」、「持たせたい土産」など、これらはいわゆる「どこかから借りてきたもの」ではなく、いえしまで生活する人たちの日常生活とつながっているものだった。だから島のみなさんは自信をもってこれらを僕らに紹介してくれた。訪れて来る人に「紹介したいもの」がたくさんあることは、とてもうらやましいことで、すごく「リッチな生活」だと思った。普段都市で生活している僕らは、果たして自分の日常生活の中にこういった「紹介したいもの」を持っているだろうか。

いえしまの魅力的な人たち

僕らが、家島本島や坊勢島を歩きまわった際には、多くの「魅力的な人たち」に出会うことができた。海運の基地では船の修理に携わっている人に話を聞いた。その人は僕らにいえしまの採石産業の歴史や現状などを詳しく解説してくれた。漁港では作業をしている漁師さんが僕らを漁船に招いてくれた。そこでその日に獲れた魚の名前やその特徴を教えてくれた。路地で井戸端会議をしている主婦や学校帰りの中学生からは「何してんの？」と話しかけられ、そこから楽しい会話がはじまった。「船の荷揚げ場らしきところ」で酒盛りをしていた人たちにも遭遇した。その人たちは僕らを快く宴会の輪に参加させてくれ、お酒を飲み交わしながら交流を深めた。あるお寿司屋さんのご主人は、いえしまで獲れる季節の魚の料理法や新商品開発の話を熱心にしてくれた。ある喫茶店ではマスターの知人を大勢呼んでもらって大いに話が盛り上がった。いえしまの魅力的な「もてなしの要素」。その中でも特に鍵となるのは「人」だと思った。いえしまには魅力的な人がたくさんいる。いえしまの歴史や文化の話を知りたいとき、お勧めの場所を知りたいとき、おいしいお店を探したいとき、いえしまの人たちに直接聞いてみることが一番良いと思った。みなさんとても親切に応えてくれた。自分が知らない情報でも知っている人を連れてきてくれた。そんなときも、僕らはいえしまで「もてなされている」という気分になった。

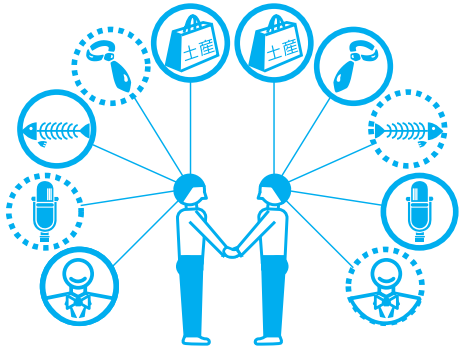
人懐っこい中学生

屋外での酒盛りに参加

喫茶店での交流

「人」がつなぐもの

いえしまの魅力的なもてなしは「人の生活」とつながっている。ある人が知合いや友人を連れてくると、その分だけ「もてなしのバリエーション」も増えることになる。つまり、「人」が「もてなしの要素」をつないでいることになる。だから、いえしまでは「人がたくさんつながっていること」が大切だと思う。そして、いえしまを訪れる人たちとのコミュニケーションを積極的に図って、「いえしまのこと」や「自分の生活のこと」をたくさん紹介してほしい。こういったことが、いえしまの「新しい観光のあり方」を形作っていくことになるのだと思う。島の人々が自らの生活レベルで訪れる人をもてなすという視点に立てば、いえしまは島の外の人々が継続的に訪れ、豊かな交流が生まれる島になる可能性を秘めていると思う。



つながる「もてなしのネタ」

豊かなもてなしの島に

「探られる島」プロジェクト2007は、平成19年の秋に家島本島・坊勢島での2泊3日のフィールドワークと大阪での4日間の会議を合わせた計7日間のワークショップの企画である。全国から多様な専門分野を持つ学生や社会人が集まり、「いえしまの生活の深層」をテーマに探った。今回は一般のご家庭に「民泊」させてもらい、いえしまの「もてなし」についても考える機会となった。これらのプログラムを通じて、専門家のアドバイスを受けながら、メンバー全員で一つのコンセプトに沿って冊子にまとめた。それがこの「探られる島」プロジェクトブック03だ。プロジェクトの中では「今後のいえしま」についてもみんなで話し合った。いえしまでは今後「観光」についても考えていくようだ。「観光」においては「もてなし」のあり方は重要な視点となる。今回僕らがいえしまを訪れて感じたことは、いえしまで生活する人たちが、自らの「日常生活の延長線上」でもてなしてくれたことに新鮮な驚きや楽しさがあったことである。だからいえしまは、むやみに「観光のための新しいモノ」をつくる必要はない、と僕らは考えている。今回僕らが感じた「魅力的なもてなしのあり方」をこれからも大切にしていってほしいと思う。僕らが今回の2泊3日のフィールドワークの結果から議論・考察した内容はいえしまの一側面を捉えているに過ぎないのかもしれない。いえしまにはまだまだ隠された魅力があるはずだ。だからこれからも僕らは新しい仲間を連れて、たびたびいえしまを探りに訪れたいと思う。

プロジェクトの仲間たちといえしまを探りに向かった

坊勢島にも上陸し産業の風景を探った

夜を徹して「家島の魅力」について話し合った

いえしま

兵庫県姫路市家島町は姫路港の沖合い約18kmに位置している。家島群島は東西26.7km・南北18.5kmにわたって散在する大小40余りの島々で、瀬戸内海国立公園特有の美しい多島海の景観を織りなしている。今回のプロジェクトで探る対象となった島は、姫路港から高速船で約30分の家島本島と坊勢島である。家島本島は世帯数が約1,800で人口は約5,700人、坊勢島は世帯数が約800で人口は約3,000人となっており、家島町のほとんどの人たちがこの2つの島で生活している。坊勢島は離島としては珍しく、近年まで人口が増え続けていたことで注目されてきた島である。本プロジェクトでは家島（家島本島）と家島群島との混同を避けるため、家島本島を漢字で「家島」、家島群島全体をひらがなで「いえしま」と使い分けて表記している。

いえしま（家島群島）

写真左上　真浦地区
写真右上　宮地区
写真左下　坊勢地区

「探られる島」プロジェクト2007

メンバー
池上 匠 / 上田 裕子 / 碓井 彰 / 内田 泰平 / 金子 瑠奈 / 後藤 究 / 上代 悦子 / 白江 俊一 / 杉原 静 / 高橋 麻衣子 / 中北 衣美 / 中島 俊介 / 野原 実穂 / 信川 政仁 / 萩尾 宣光 / 福井 章乃 / 舩木 直人 / 細野 大二郎 / 宮田 由香理 / 村田 庸介 / 森本 奈津子 / 和田 佳代子

アドバイザー
樋栄 ひかる / 山崎 義人 / 山崎 亮

「探られる島」プロジェクト実行委員会
岩本 陽子 / 金山 敏美 / 小島 雅也 / 高島 一彰 / 中村 有作 / 福田 悦子 / 山下 芳正
神庭 慎次 / 醍醐 孝典 / 檀上 祐樹 / 長生 大作 / 西上 ありさ

主催　「探られる島」プロジェクト実行委員会
協力　魅力あるいえしまをつくろう会 / studio-S / studio-L / 家島観光事業組合 / NPO法人環境デザイン･エキスパーツ･ネットワーク

「探られる島」プロジェクトブック03

2007年11月4日発行
発行　studio-S
テキスト　醍醐 孝典
デザイン　神庭 慎次
編集　「探られる島」プロジェクト2007メンバー / studio-S
印刷　株式会社ラピト

本誌に関するお問い合わせは　studio-s@npo-eden.jp
※本誌掲載の写真、記事の無断転載はお断りします。

『いえしま』を発見しに行く人、今後も大募集。

http://www.npo-eden.jp/studio-s/

「探られる島」プロジェクト

ここ一番の勝負

参加者 VS 島のお父さん

呑み比べ対決！その意外な結末！

きっとあなたは知らなかったことを後悔します！

瀬戸内海で知ったいえしまの真実

今、ここがアツイ！

プロジェクトブック01「いえしまにおじゃまします」

プロジェクトブック02「TOURISTIC ISLANDS」

好評！！配布中